

日本の子どもの対人場面での自己制御行動： 乳幼児期から青年期にかけての発達過程

中京大学心理学部 水野 里恵^注

Japanese Children's Interpersonal Self-regulation: Developmental Perspective from Infancy to Adolescence

MIZUNO, Rie (School of Psychology, Chukyo University)

This research investigated the developmental changes in Japanese children's self-regulation. The mothers of 75 boys and 75 girls rated their children on the Temperament Questionnaire when the children were 1 year old and 3 years and 7 months old. When the children were 4 years and 1 month old, the mothers completed a questionnaire about self-regulation, which asked not only how often their children displayed self-assertive and self-inhibited behaviors but also how desirable the mothers thought their children's self-assertive and self-inhibited behaviors to be. When the children were 18 years and 9 months old, 20 boys and 20 girls out of 150 children and their mothers completed a questionnaire regarding how often they exhibited self-regulated behaviors and how desirable they thought them to be.

The results showed that in preschool years (N=150), temperamentally uninhibited children exhibited self-assertive behaviors in peer relationships but not in family relationships. The mothers of the children making high self-assertion satisfied their children's behaviors. In adolescence (N = 40), although the children thought that both self-inhibited and self-assertive behaviors were highly appreciated, they refrained from displaying self-assertive behaviors and exhibited self-inhibited behaviors more often with their peers. A set of longitudinal data was investigated by utilizing structural covariance analysis. The results were as follows: (a) when the children were temperamentally uninhibited toward new situation in infancy, they took self-assertive behaviors among peers in preschool years, (b) the more rapid the children's development of self-assertive behaviors, the higher the mothers' satisfactions of their children's behaviors, and (c) the mothers' satisfactions of their children's behaviors affected the children's beliefs about self-assertive behaviors and promoted their self-assertive behaviors in the long run.

Key words: interpersonal self-regulation, self-assertive behaviors, Japanese children

目 的

自分の意思や欲求と他者のそれらが葛藤するような場面においてわれわれは様々な行動をとる。自分の意思を押し通そうとすることもあるし、他者の意思を優先させ自分の主張を取り下げることがある。あるいは、全く自分の意思を表明しないこともある。集団活動を行っている時、リーダーシップをとり自分の意見を臆することなく述べる場合もあるし、フォロアーに徹する行動をとりがちなる場合もある。本研究は、このような対人場面で自分の意思を制御する行動を現代の日本の青年がどのように行っているかに焦点を当て、その発達過程に働く要因について検

討しようとするものである。特に、自分の意見・意思を主張しリーダーシップをとる行動の発達過程に焦点を当てて考えたい。

人・もののグローバル化に伴って、異なる価値観や文化的背景を持つ人々とコミュニケーションをとり活動を共にする機会が多くなっている。このような状況では、自分の意見を適切に表明することが必要になってくるし、リーダーシップを発揮しつつ他者と協調する人材が求められるようになってくる。そこで、本研究では、自己の行動規範に照らして必要な時には自分の意見・意思を明確にしてリーダーシップをとる行動（本稿では、「自己主張的自己制御行動」と定義）の発達を中心に考えたい。これまで日本では、「他者の意図を察すること」が美德とされ「言わなければわからない人」が揶揄されていた。現在はそうした状況は変わったのだろうか。否、未だ「空気を読む」ことが美德とされ「空気を読めない

注 r-mizuno@lets.chukyo-u.ac.jp

本研究は 2008 年度中京大学特定研究助成を受けて実施された。

人」が揶揄されており、従来と根本的な状況は変わっていないように思われる。一方で、「自己」を明確にせずに行う匿名での意見の表明は、簡便な通信手段が整ったこともあって、活発になされるようになっている。だが、これは、自己主張的自己制御行動とは一線を画するものと考えられる。なぜなら、匿名での意思表示は、適切な自己主張の枠を超え、暴言や中傷につながる危険性を含んでおり、目の前にいる他者を相手にリーダーシップをとる姿勢につながるものではないからである。なお、「自己主張的自己制御行動」は、1950年代にアメリカの行動療法から生まれた、自己主張が苦手な人に対して行うコミュニケーションスキルとしてのアサーション(平木, 1993)に似た概念である。ただし、本研究で扱う「自己主張的自己制御行動」は、どのような方法であれともかく自分の意思を主張する行動を指しており、適切な方法(場面に即し他者に受け入れられる方法)で主張するアサーションを必ずしも意味していない。ゆえに、主張する方法が他者との関係で軋轢を生むものであっても、自己の行動規範に照らして主張する行動を「自己主張的自己制御行動」として扱う。こうした定義を使用して研究を進めるのは、「自己主張的自己制御行動」が以下のような発達心理学史上の概念に基づくからである。

日本人の対人場面での自己制御行動を「自己主張的(自己実現的)側面」と「自己抑制的側面」という概念で捉え、その発達研究を進めたのは柏木である(柏木, 1988)。それ以前、自己制御機能に関する研究は、親の支持や要望に従うこと・満足の遅延などこれまで主に自分の欲求や意思を抑制するといった抑制的側面に焦点を当てて行なわれることが多かった。こうした研究動向に対し、柏木(1988)は、自己制御機能の自己主張的側面として「自分の意思、欲求を明確に持ち、これを外に向かって表わし実現するという面」と定義し、この自己主張的側面もまた、自己抑制的側面と同じように、子どもが習得すべき重要な課題と考えた。そして、子どもが自己制御機能の2つの側面を集団生活の中でどのように行っているかを質問紙調査により横断的に調査した。その結果、自己主張は3歳から4歳にかけて急速に伸びるが、それ以降はほとんど伸びが見られず、自己抑制は3歳から6歳まで順調に伸びていき、男児よりも女児の方が一貫して高い傾向にあることを示した。また、年齢が高くなるに従い主張が低く抑制が高い子どもの割合が多くなっていくことを報告した。

これ以降現在に至るまで、日本においては、就学前期の子どもを対象にした同胞集団での自己制御機能の発達研究は自己主張と自己抑制の2側面から進められている(伊藤, 2002; 松永, 2008; 森下, 2003; 戸田・高野, 2004)。調査方法は、横断研究と縦断研究を組み合わせた質問紙調査(伊藤, 2002; 森下, 2003; 戸田・高野, 2004)、親評定と教師(保育者)評定との同時調査(松永, 2008; 森下, 2003)と研究ごとに異なり、就学前期の子どもの自己制御行動の発達について多様な面からの検討がなされている。しかしながら、これらの研究は、研究法上の違いもあり、自己主張と自己抑制がどのような発達過程を辿るのかについて同一の結果を報告してはいない。これらの研究に共通するのは、自己制御行動を2つの側面から考えることが有益であるとの問題意識と、いずれも3歳以降6歳までのデータを収集して、発達過程に働く要因について考察している点である。

柏木(1988)以降の研究と就学前期の子どもの自己制御機能を2側面に分けて考えるという問題意識を共有しつつ、乳児期から観察される子どもの気質的個人差を要因に組み込むことを主張したのは水野(2002)である。水野(2002)は、日本の子どもの自己制御行動は相手が誰かによって異なるのではないかとこの観点から、150人の幼児を対象に3場面(相手が同胞の場合、母親・きょうだいの場合、父親・祖父母の場合)の自己主張的側面・自己抑制的側面について比較した。そして、友達に対する自己主張的自己制御行動は他の2場面(母・きょうだい、父親・祖父母が相手)に比べて低いこと、子どもが友達に対して自分の意思や欲求を実現させるためにとる自己主張的自己制御行動は、新奇な事物や人物に対して物怖じしない気質を持つ子どもの方が多いが、家族に対してとる自己主張的自己制御行動にはそのような関連がないことを報告した。この報告は、日本の子どもの自己主張的自己制御行動が場面によって使い分けられているということを明らかにし、日本の子どもは発達初期から「うち」と「そと」を使い分けた社会化を受けているとの東(1994)の指摘を支持した。同時に、対人場面での自己制御行動の個人差には発達初期の気質的個人差が影響を及ぼしていることを示唆したものである。

では、青年期に達すると自己制御行動はどのようなのだろうか。幼児期に見られた子どもの自己制御行動における個人差は連続性を持つのだろうか、あるいは、変化するのだろうか。子どもの対人場面での自

己制御行動の発達過程に、母親の態度や価値観・行動などは影響するのだろうか。また、母親自身は、対人場面で「自己」を制御することに対しどのような価値観を持ち、実際にどのような行動をしているのだろうか。

本研究は、上記のような問題意識に立ち、乳幼児期から青年期にかけての日本人の対人場面での自己制御行動の発達過程について解明することを目的にした。ゆえに、水野（2002）の調査対象となった子どもと母親を対象に追跡縦断研究を実施した。そして、水野（2002）では扱わなかった幼児期の母親データの分析を行った。焦点を当てるのは自己制御行動の自己主張的（自己実現的）側面であるが、本研究の目的は以下の5点である。(1) 幼児期の子どもが示す自己制御行動に対して母親はどのように評価しているのか、子どもの行動と母親の満足感には関連が見られるのかを明らかにする。(2) 青年期に達した子どもは対人場面での自己制御行動に対してどのような価値観を持ち、どのような行動を行っているかを明らかにする。(3) 母親は対人場面での自己制御行動に対してどのような価値観を持ち、どのような行動を行っているかを明らかにする。(4) 青年期の子どもの価値観・行動と母親の価値観・行動には関連があるのかを検討する。(5) 子どもの自己主張的自己制御行動の発達過程について乳幼児期～青年期の縦断データから総合的に検討する。本研究の究極の目的は、幼児期に子どもが示す自己制御行動に対して抱いた母親の満足感、ならびに、母親自身の対人場面での自己制御に関する価値観と実際の行動を要因に組み込んで、日本の青年の自己主張的自己制御行動における個人差の発達過程を解明することである。

研究1：幼児期の子どもの自己制御行動： 子どもの気質との関連・母親の 満足感との関連

方法

乳幼児期の子どもに関するデータについては水野（2002）を使用した。ただし、子どもの自己制御行動の尺度は、母親データや青年期のデータと比較できる形に再構成した。以下に本研究に使用した乳幼児期縦断データの概要を記す（詳細については水野（2002）を参照されたい）。

研究協力者：第一子 150名

（男児75名、女児75名）とその母親

第1回調査：乳児期

実施時期：1990年10月から1991年4月

子どもの平均月齢は11.5ヶ月（SD=1.3ヶ月）、母親の平均年齢は28.3歳（SD=3.6歳）
質問紙の内容：子どもの気質…日本語版 Revised Infant Temperament Questionnaire (RITQ) (6件法) の3次元：「接近と回避」・「順応性」・「気分の質」

第2回調査：幼児期 I

実施時期：1994年4月

子どもの平均年齢は3歳7ヶ月（SD=6ヶ月）
質問紙の内容：子どもの気質…Behavioral Style Questionnaire (BSQ) を翻訳したもの

第3回調査：幼児期 II

実施時期：1994年10月

子どもの平均年齢は4歳1ヶ月（SD=6ヶ月）
質問紙の内容：自己制御機能質問紙：自己制御機能に関する項目18項目を作成し、(a)友達といる場合、(b)母親・きょうだいといる場合、(c)父親・祖父母といる場合の3場面に分けて、子どもが自己制御行動をどの程度するかを4段階評定（1：しない～4：非常によくする）で尋ねた。また、3場面で自分の子どもが示す自己制御行動について母親がどのように感じているかを4段階評定（1：非常に困る～4：非常に良い）で回答を求めた。すなわち、自分の子どもが示す自己制御行動についての満足度を4段階評定で母親に尋ねた。

結果

子どもの自己制御行動の3場面の尺度得点の平均値を比較分析した結果や尺度得点と気質との関連性の分析結果は水野（2002）を確認するに留まるが、本研究では、子どもの自己制御行動の尺度を母親データや青年期のデータと比較できる形に再構成した（加算平均値を尺度得点とした）ため、それらの分析結果についても報告する。

自己制御行動尺度の算出

自己制御機能に関わる行動が、(a)友達といる場合、(b)母親・きょうだいといる場合、(c)父親・祖父母といる場合の3場面それぞれで、どのように母親に認識されているかを調べるため、第3回調査の自己制御機能に関する18項目について3場面別に因子分

Table 1 幼児期の子どもの自己制御機能質問紙の因子分析結果

項目	尺度	(a)友達との場合 (b)母親・弟妹との場合 (c)父親・祖父母との場合					
		主張	抑制	主張	抑制	主張	抑制
1. ゲームと一緒にする時、遊びのやり方や役割など、自分のしたいことをはっきり言う	主張	.78	.04	.89	.19	.80	.01
2. 待ってと言われると、やりたいことでも我慢する	抑制	.03	.82	.02	.58	.03	.53
3. 自分の意見をはっきり言う	主張	.86	.19	.72	-.09	.73	.05
4. 欲しいものがすぐに手に入らなくても、我慢する	抑制	.08	.58	.05	.85	.05	.71
5. ルール違反をされると、抗議する	主張	.58	.06	.86	.00	.76	.17
6. 貸してと言われたら、使っているものでも貸す	抑制	.16	.46	.09	.42	.15	.89
7. 積極的にあれやろう、これやろうと言って、リードする	主張	.82	.19	.72	-.03	.72	.02
8. 嫌なことがあっても、感情を爆発しない	抑制	.03	.21	-.09	-.05	.03	.11
9. 約束を無視されたとき、抗議する	主張	.47	.22	.64	.02	.61	.02
10. 注意されなくても、以前にはいけないと言われたことはしない	抑制	-.07	.19	-.02	.13	.06	.15
11. 何事も自分で決めないと承知しない	主張	.47	.18	.35	.36	.44	.32
12. 嫌なことをされたとき、「いや」とか「やめて」と言う	主張	.58	.09	.52	.09	.62	.00
13.* 思いどおりいかない、かんしゃくを起こす	抑制	.16	.70	.11	.59	.26	.35
14.* 一度言い出したら、頼まれても耳を貸さない	抑制	.01	.53	-.01	.70	.01	.70
15. 気に入ったことを見つげると、自分から率先してやろうと誘う	主張	.76	-.03	.43	.01	.62	-.03
16. 気に入ったものを他者が持っているとき、「貸して」という	抑制	.48	-.05	.29	.01	.52	.04
17.* 「～して」と頼まれても、嫌だといって我を押し通す	抑制	.06	.47	.03	.66	.04	.81
18. うれしがったり悲しがったり感情表現を大きく表す	主張	.49	.28	.52	.16	.55	.02
二乗和		4.25	2.25	3.32	2.44	4.28	2.42
自己制御尺度 (*逆転項目)		自己主張	自己抑制	自己主張	自己抑制	自己主張	自己抑制
	α 係数	.87	.71	.82	.75	.87	.76

析（主因子法・プロマックス回転）を行った。この際、固有値の推移 ((a) 5.43, 2.24, 1.37, 1.16, (b) 4.70, 2.28, 1.35, 1.14, (c) 5.22, 2.60, 1.22, 1.05,)・因子の解釈可能性を考慮して、それぞれの場面ごとに「自己主張的自己制御機能」・「自己抑制的自己制御機能」の2因子を抽出した (Table 1)。なお、「嫌なことがあっても、感情を爆発しない」・「注意されなくても、以前にはいけないと言われたことはしない」の2項目はいずれの因子にも負荷しなかった。3場面すべてでどちらか片方の因子のみに、35以上の負荷を示した項目で尺度を作成し、「自己主張的自己制御機能」(項目1・3・5・7・9・12・15・18の8項目)・「自己抑制的自己制御機能」(項目2・4・6・13・14・17の6項目(項目13・14・17は逆転項目))とした。それぞれの尺度の α 係数を算出した結果、(a)友達という場合の自己主張的自己制御機能尺度は.87, 自己抑制的自己制御機能尺度は.71, (b)母親・弟や妹という場合の自己主張的自己制御機能尺度は.82, 自己抑制的自己制御機能尺度は.75, (c)父親・祖父母という場合の自己主張的自己制御機能尺度は.87, 自己抑制的自己制御機能尺度は.76であった。それぞれの尺度に属する項目の加算平均値を尺度得点とし、以下の分析で使用した。子どもの自己制御行動に対する母親の評価(満足感)尺度は、子どもの自己制御機能尺度と同じ項目の加算平均値を求めて算出した。従って、項目1・3・5・7・9・12・15・18の8項目の加算平均

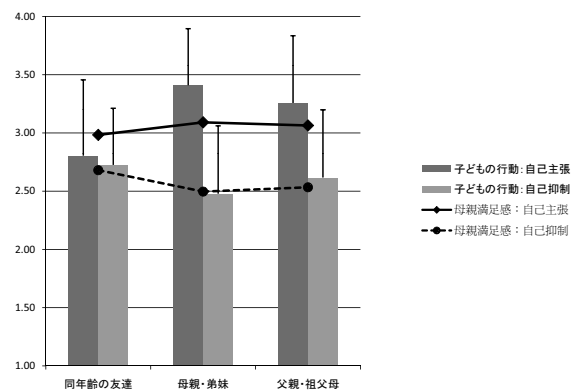


Figure 1 幼児期の子どもの自己制御行動・母親の満足感

値が自己主張的行動に対する母親評価尺度、項目2・4・6・13・14・17の6項目の加算平均値が自己抑制的行動に対する母親評価尺度となっている。3場面の自己制御行動尺度得点の平均値、ならびに、母親の評価尺度得点の平均値を Figure 1 に示した。

子どもの3場面の主張面・抑制面の自己制御行動尺度得点の平均値の比較

相手が誰かによって主張面・抑制面の自己制御行動尺度得点の平均値に有意な差があるかを検討するため、場面 ((a)(b)(c)の3場面)×行動面(主張面・抑制面)の被験者内二要因の分散分析を行った。場面の主効果、行動面の主効果、場面と行動面の交互作用、すべてが有意であった ($F(2, 148)=34.26, p<.001$; $F(1, 148)=88.64, p<.001$; $F(2, 148)$

Table 2 気質尺度得点の平均値 (SD) : 乳児期・幼児期 I

尺度名	高得点の意味するところ	N=150			
		乳児期		幼児期 I	
		平均値	SD	平均値	SD
接近と回避	初めての人・もの・事態にしりごみする	2.93	.89	3.23	.78
順応性	環境の変化に対して順応性がない	2.72	.69	3.08	.62
気分の質	機嫌が悪くなりやすい	3.52	.70	4.54	.61

Table 3 3 場面での子どもの自己制御行動とその行動に対する母親の満足感・乳幼児期の気質との相関

	N=150						
	幼児期 II	幼児期 I 気質			乳児期 気質		
	母親満足感	回避傾向 (接近-回避)	非順応性	気分の質 ネガティブ	回避傾向 (接近-回避)	非順応性	気分の質 ネガティブ
自己主張(友達)	.706***	-.377***	-.226**	-.019	-.199*	-.210*	-.170*
自己抑制(友達)	.756***	.111	-.312***	-.391***	.039	.028	-.126
自己主張(母親・弟妹)	.408***	-.038	.056	.028	.013	-.086	-.080
自己抑制(母親・弟妹)	.802***	-.146	-.495***	-.473***	-.147	-.124	-.164*
自己主張(父親・祖父母)	.596***	-.076	-.007	-.089	-.047	-.089	-.119
自己抑制(父親・祖父母)	.813***	-.117	-.385***	-.334***	-.061	.017	.028

*p <.05, **p<.01, ***p<.001

=61.43, $p < .001$)。下位検定の結果、以下の 5 点が明らかになった。(1) (a) 友達と一緒にいる場合の自己制御行動尺度得点の平均値は、その他の場面 (b) (c) と比べて有意に低かった。(2) 主張面の自己制御行動尺度得点の平均値は抑制面の平均値と比較して有意に高かった。(3) (a) 友達という場合には主張面・抑制面の平均値に有意な差はなかったが、(b) (c) ともに、主張面の平均値が抑制面の平均値より有意に高くなった。すなわち、子どもは家族という場合には主張的な自己制御行動を抑制的な制御行動より多くとっていた。(4) 主張面の自己制御行動の平均値は (a) が (b) (c) より有意に低かった。(5) 抑制面の自己制御行動の平均値は (b) が (a) (c) より有意に低かった。

幼児期の子どもの自己制御行動と乳幼児期の気質との関連

自己制御行動の個人差に子どもの気質が影響しているのではないだろうか。乳児期・幼児期 I で測定された「接近と回避」「順応性」「気分の質」の尺度得点を算出した。気質尺度得点の平均値を Table 2 に示した。乳児期・幼児期 I の子どもの気質尺度得点と幼児期 II の自己制御行動尺度得点との相関を求めた結果を Table 3 に示した。幼児期 II の友達に対する自己主張的自己制御行動と乳児期・幼児期 I の回避傾向得点・非順応性得点との間に有意な負の

相関が見られた。すなわち、友達に対して自己主張的自己制御行動をとる子どもは、初めての人や見慣れない事態で物怖じせず（接近傾向にあり）、状況の変化に適応的（順応的）な子どもであった。幼児期 II の母親や弟妹・父親や祖父母に対する自己主張的自己制御行動と乳児期・幼児期 I の回避傾向得点・非順応性得点との間に関連は見られなかった。3 場面いずれでも幼児期 II の自己抑制的自己制御行動得点と幼児期 I の非順応性得点・ネガティブな気分の質得点には有意な負の相関があった。

幼児期の子どもの自己制御行動と母親の満足感との関連

自分の子どもが自己制御行動を多くとればとるほど母親の満足度は上がるものなのであろうか。それを検討するため、子どもの自己制御尺度得点と母親の評価尺度得点との相関を求めた (Table 3)。3 場面いずれでも有意な相関が見られ、相手が誰であろうと自己制御行動をよくとる子どもの母親は、自分の子どものそういう行動を好ましいと評価すること、すなわち母親の満足感は高くなることが確認された。ところで、3 場面の主張面・抑制面の母親の満足得点の平均値に有意な差があるかを検討するため、場面 (a) (b) (c) の 3 場面 × 行動面 (主張面・抑制面) の被験者内二要因の分散分析を行った。行動面の主効果、場面と行動面の交互作用が有意であった (F

(1, 148)=132.27, $p < .001$; $F(2, 148)=14.46, p < .001$)。下位検定の結果、以下の2点が明らかになった。(1) 子どもの主張面の行動に対する満足感の平均値は抑制面の行動に対する満足感より有意に高かった。(2) 子どもの主張面の母親満足感平均値は友達が相手の場合が他の2場面より低くなった。一方、子どもの抑制面の母親満足感平均値は友達が相手の場合が他の2場面より高かった。(3) 各場面の母親満足感平均値は、主張面に対するものが抑制面に対するものより高かった。

考察

3場面2側面(主張面・抑制面)の自己制御行動得点の平均値の比較結果から、以下が明らかになった。(1) 子どもは自分の意思を抑制するよりは、自分の欲求を通そうと主張し遊びの主導権をとる傾向にある。(2) 家族という場合には特にその傾向が強い。(3) 友達という場合には自己主張的行動は抑えられており、主張面・抑制面の行動が同程度に見られる。これらから、幼児期の子どもは自分の意思を主張し遊びでも主導権をとりたがるが、既に「うち(対家族)」と「そと(対友達)」での行動の違いが見られるようになってくる。すなわち、「そと」では他者の意思を尊重し、あまり出しゃばらないよう行動するようになってくる。さて、母親満足感の平均値の比較結果を考えると、母親は、家族の中で今回研究対象となった子どもが自己主張をすることに高い評価をしている。そして、子どもが友達に対してあまり自己主張行動をとらないことに対して低い満足感しか示していない。すなわち、母親は3場面いずれでも子どもの自己主張行動に高い評価を与えている。こうしたことから考えると、子どもが友達関係の中であまり自己主張行動をとらないのは親からの社会化の結果ではなさそうである。

さて、抑制面での自己制御行動は母親・きょうだいに対する場合は低くなっていたが、これは今回の研究協力者がすべて第一子であったという事情も働いているだろう。対象となった子ども達は「上の子」あるいは長子であるがゆえに、下の子や家族に対して主導権をとる一方で自分の欲求を我慢するのは苦手とすることがあるかもしれない。しかしながら、家族内での子どもの抑制行動の低さに対する母親の満足感低く低くなっており、母親は子どもに対して高い抑制行動を求めていると言えよう。

次に、個人差について考える。回避傾向得点と非

順応性得点は友達に対する自己主張的自己制御行動得点とのみ負の相関があったことから、これらの気質特性を備えた子どもは「そと」でも自己主張するが、そうでない子どもは「そと」では自己主張しない傾向にあると考えられた。順応性が高く些細なことで機嫌を損ねない気質特性を持った子どもは、3場面いずれでも自己抑制的自己制御行動がとれていた。以上、家族に対する自己主張的自己制御行動は多くとられる傾向にあり子どもの気質には影響されないが、友達に対する自己主張的自己制御行動は低くなる傾向にあり子どもの気質の影響を受けていた。このことは、「遊びで主導権をとる・自分の意思を表明する」行動は、家庭での行動が友達集団の中へと般化されるのではなく、子どもの気質の特性に拠るところが多いのではないかと考えられた。そして、「内弁慶な子ども」が少なからずいることが推測させた。また、子どもの自己制御行動と母親の満足感との相関結果から、自己制御行動をよくとる子どもの母親は自分の子どものそうした行動への満足度が高くなると考えられた。

研究2：青年期での追跡縦断研究

方法

研究協力者：乳幼児期の縦断研究対象者150名から、2009年1月現在連絡先が判明した70組の母子それぞれに対人場面での自己制御行動について尋ねる質問紙を送付した。子ども46名、母親48名からの回答が得られた(有効回答率65.7%, 68.6%)。本研究では、今回の調査・幼児期の自己制御行動調査(母親回答)・子どもの気質調査(母親回答)の3つにすべて有効回答が得られている40名の(男性20名、女性20名、平均年齢18歳9ヶ月)とその母親のデータを対象に分析した。

実施時期：2009年2月

調査質問紙の内容：

青年用質問紙 幼児期Ⅱの項目内容を参考に青年用の自己制御行動の主張的側面・抑制的側面を表現する20項目を作成した。それらの自己制御行動を①同年齢の友達という場合、②親やきょうだいと一緒にいる場合、③目上の人と一緒にいる場合の3場面で、最近2~3週間の間にどの程度とったかについて4段階評定(1：あまりとらない~4：非常によくとる)で回答を求めた。また、各3場面でそうした自己制御行動をとることをどう考えるか(望ましい行動と

Table 4 青年期の子どもの自己制御機能質問紙の因子分析結果

尺度		同年齢の友達と一緒にいる時			親やきょうだいと一緒にいる時			サークルの先輩・バイト先の上司		
		主張	抑制	自己中心	主張	抑制	自己中心	主張	抑制	自己中心
1	行事やイベントをする時、その企画や役割など、自分のしたいことをはっきり言う	.61	.08	.14	.91	-.24	-.23	.80	.08	-.07
2	皆でやるべきことがある時は、自分のやりたいことを我慢して、それを優先する。	.10	.41	-.05	.00	.56	.10	.03	.75	.06
3	他の人と違ったとしても、自分の意見をはっきり言う	.79	-.10	-.35	.32	-.15	.29	.77	.18	-.08
4	自分の要望が受け入れられなくても我慢する	.08	.72	-.27	.08	.75	-.03	-.02	.75	.00
5	ルール違反をされると抗議する	.62	-.05	.27	.32	-.19	.23	.61	.23	.14
6	貸してと言われたら、使っているものでも貸す。	-.06	.57	.03	.19	.50	.11	-.05	.76	.15
7	積極的にあれやろう、これやろうと言って、リードする。	.63	-.06	.16	.76	.07	-.05	.82	-.06	.10
8	嫌なことがあっても感情を爆発させない。	.13	.54	-.33	-.03	.34	-.31	.01	.40	-.16
9	約束を無視された時、抗議する。	.41	-.16	.23	.46	.02	.19	.26	-.22	.59
10	周囲の雰囲気や押し流されることなく、「悪い・間違っている」と思うことはしない。	.09	.21	-.17	.11	.07	.33	.17	.47	-.08
11	話し合いの場で進んで自分の意見を述べる。	.57	-.15	-.16	.60	.20	.09	.74	.03	-.04
12	嫌なことを頼まれた時、嫌だという自分の気持ちを伝える。	.42	.17	.10	.12	-.11	.49	.27	-.33	.54
13	自分の思い通りにいかないと、すぐに不機嫌になる。	.27	.02	.74	-.02	-.11	.76	-.18	-.06	.90
14	一度言い出したら、頼まれたり説得されても耳を貸さない。	.20	-.09	.44	-.02	-.11	.84	.02	-.07	.76
15	気に入ったこと・やりたいことを見つけると、自分から率先してやろうと誘う。	.53	.06	.16	.69	.24	-.01	.65	-.05	.03
16	不当なこと・理不尽なことを言われた場合でも我慢する。	.05	.66	.17	-.03	.62	-.02	.11	.30	-.19
17	たとえ言いにくいことであっても、「間違っている」と思うことは指摘する。	.66	.23	.01	.21	.16	.58	.76	.11	.03
18	他人が使っているものでも、貸してと言う。	.06	.23	.76	-.06	.20	.59	.02	.35	.50
19	頼み事がある場合でも、なかなか切り出しにくい。	-.25	.54	.24	.02	.01	-.15	-.60	.28	.21
20	自分に決められた役割でも、やりたくないこと・興味のないことはさぼってしまう。	-.10	-.24	.70	-.21	.09	.75	-.11	.15	.81
二乗和		3.71	2.86	2.62	3.91	3.32	2.35	4.91	3.71	2.79
自己制御尺度		主張 抑制			主張 抑制			主張 抑制		
α 係数		.80 .70			.79 .68			.84 .64		

思うのか)について5段階評定(1:望ましくない~3:どちらとも言えない~5:望ましい)で回答を求めた。

母親用質問紙 青年用質問紙と項目・構成は同一であるが、設定した場面は、①家族と一緒にいる場合、②町内会・PTAの会合、③義理の親・親戚と一緒にいる場合の3場面である。青年用質問紙と同一の20項目に示される自己制御行動を各3場面ですべて最近2~3週間の間にどの程度とったかについて4段階評定、そうした自己制御行動をとることをどの程度望ましいと思うか(価値観)について5段階評定での回答が求められた。

結果

青年期の自己制御行動尺度得点の算出

子どもの自己制御尺度得点・価値尺度得点の算出

各場面の自己制御行動20項目について因子分析(主因子解・プロマックス回転)を行い、固有値の推移(①4.89, 2.72, 2.30, 1.65, ②4.96, 2.84, 1.81, 1.54, ③5.35, 2.84, 2.05, 1.46)・因子の解釈可能性を考慮して3因子を抽出した。第一因子は、「行事やイベントをする時、その企画や役割など、自分のしたいことをはっきり言う」「他の人と違ったとしても、自分の意見をはっきり言う」「積極的にあれやろう、これやろうと言って、リードする」に高い負荷を示しており自己制御行動の主張面を表す因子であった。第二因子は、「自分の要望が受け入れら

れなくとも我慢する」「不当なこと・理不尽なことを言われた場合でも我慢する」「皆でやるべきことがある時は、自分のやりたいことを我慢して、それを優先する」に高い負荷を示しており自己制御行動の抑制面を表す因子であった。第三因子は、「自分の思い通りにいかないと、すぐに不機嫌になる」「自分に決められた役割でも、やりたくないこと・興味のないことはさぼってしまう」「一度言い出したら、頼まれたり説得されても耳を貸さない」に高い負荷を示しており自己制御行動とは言えない自己中心的な態度を表す因子であった(Table 4)。3場面での因子構造は同一であったが、3因子に負荷する項目には若干の相違があった。そこで、①と②の場面で同じ因子に負荷した項目の加算平均値を算出することで「自己主張的自己制御行動」尺度得点、「自己抑制的自己制御行動」尺度得点を算出した。自己制御行動の尺度得点3場面のそれぞれの信頼性係数(α)は、主張尺度については①が.80, ②が.79, ③が.84, 抑制尺度については①が.70, ②が.68, ③が.64であった。また、そうした行動をどの程度望ましいと思っているかの価値尺度得点を行動尺度得点の算出法で算出した(価値尺度得点算出に用いられた項目は行動尺度得点と同一である)。価値尺度得点の信頼性係数(α)は、主張尺度については①が.81, ②が.79, ③が.82, 抑制尺度については①が.68, ②が.64, ③が.68であった。行動尺度得点・価値尺度得点の3場面の平均値をFigure 2に

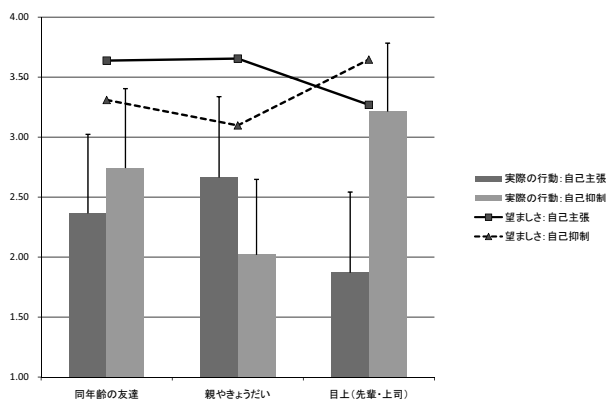


Figure 2 青年期の子どもの自己制御行動・その行動の望ましさ (価値観)

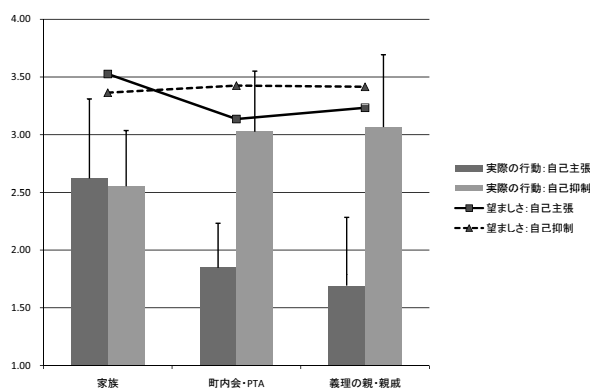


Figure 3 母親の自己制御行動・その行動の望ましさ (価値観)

示した。

母親の自己制御尺度得点・価値尺度得点の算出

母親の3場面(対家族, 対町内の人々, 対親戚)での自己制御行動と価値観の尺度得点を, 青年の行動尺度得点の算出法で算出した。自己制御行動の尺度得点3場面のそれぞれの信頼性係数(α)は, 主張尺度については①が .83, ②が .63, ③が .88, 抑制尺度については①が .54, ②が .62, ③が .67であった。価値尺度得点の信頼性係数(α)は, 主張尺度については①が .81, ②が .70, ③が .76, 抑制尺度については①が .45, ②が .73, ③が .68であった(母親の因子構造は, 青年のそれと異なる部分があったが, 青年尺度得点との比較が目的であるので, 母親尺度得点の算出法は青年尺度得点の算出法と同一にした)。母親の行動尺度得点・価値尺度得点の3場面の平均値を Figure 3 に示した。

子どもの3場面の主張面・抑制面の自己制御行動尺度得点の平均値の比較

相手が誰かによって主張面・抑制面の自己制御行動尺度得点の平均値に有意な差があるかを検討するため, 場面(①②③の3場面)×行動面(主張面・抑制面)の被験者内二要因の分散分析を行った。場面の主効果, 行動面の主効果, 場面と行動面の交互作用, すべてが有意であった($F(2, 38)=4.73, p<.05$; $F(1, 38)=10.05, p<.01$; $F(2, 38)=67.65, p<.001$)。下位検定の結果, 以下の5点が明らかになった。(1) ②家族に対する自己制御行動尺度得点の平均値は, その他の場面(①③)と比べて有意に低かった。(2) 抑制面の自己制御行動尺度得点の平均値は主張面の平均値と比較して有意に高かった。(3) ①友達という場合③目上と一緒にいる場合には抑制

面が主張面より有意に高かった。一方, ②家族と一緒にいる場合には主張面が抑制面より有意に高かった。すなわち, 子どもは家族という場合には主張的な自己制御行動を抑制的な制御行動より多くとり, 友達と一緒にいる場合は抑制的な自己制御行動を主張的な自己制御行動より多くとることがわかった。(4) 主張面の自己制御行動の平均値は②>①>③の順で高かった。(5) 抑制面の自己制御行動の平均値は③>①>②の順で高かった。

子どもの3場面の主張面・抑制面の価値尺度得点の平均値の比較

相手が誰かによって主張面・抑制面の価値尺度得点の平均値に有意な差があるかを検討するため, 場面(①②③の3場面)×行動面(主張面・抑制面)の被験者内二要因の分散分析を行った。場面と行動面の交互作用が有意であった($F(2, 38)=22.07, p<.001$)。下位検定の結果, 以下の3点が明らかになった。(1) ①友達という場合と②家族と一緒にいる場合には主張面が抑制面より有意に高かった。一方, ③目上と一緒にいる場合には抑制面が主張面より有意に高かった。すなわち, 子どもは友達や家族という場合には主張的な自己制御行動を多くとることが望ましいと考えており, 目上と一緒にいる場合は抑制的な自己制御行動を望ましいと考えることがわかった。(2) 主張面の価値尺度得点の平均値は①②が③より有意に高かった。(3) 抑制面の価値尺度得点の平均値は③が①②より有意に高かった。

母親の3場面の主張面・抑制面の自己制御行動尺度得点の平均値の比較

相手が誰かによって主張面・抑制面の自己制御行動尺度得点の平均値に有意な差があるかを検討する

Table 5 青年期の子どもの行動・価値観とその母親の行動・価値観の相関

N=40

	母親の行動・価値観												
	対家族自己		対町内自己		対親戚自己		対家族自己		対町内自己		対親戚自己		
	主張(行動)	抑制(行動)	主張(行動)	抑制(行動)	主張(行動)	抑制(行動)	主張(価値)	抑制(価値)	主張(価値)	抑制(価値)	主張(価値)	抑制(価値)	
対友達自己主張(行動)	.006	-.112	.256	-.127	.386*	-.529**	-.015	-.147	.128	.008	.432**	.186	
対友達自己抑制(行動)	-.079	.178	-.443**	.468**	-.046	.471**	.035	.200	-.299	.056	.053	.218	
対家族自己主張(行動)	.131	-.068	.121	-.158	.314	-.334*	.083	.128	.012	.005	.252	.196	
対家族自己抑制(行動)	.070	.224	-.034	.184	.056	.237	-.012	.192	.221	.085	.250	.112	
青年の行動	対目上自己主張(行動)	.136	.033	.118	-.095	.357*	-.282	.222	.070	.138	.158	.293	.158
	対目上自己抑制(行動)	-.008	.055	-.268	.398*	-.065	.271	-.115	.050	-.076	.028	.112	.196
価値観	対友達自己主張(価値)	.075	-.264	.168	-.072	.333*	-.492**	.119	-.072	.189	-.071	.292	.095
	対友達自己抑制(価値)	.108	-.261	-.191	.380*	.191	.009	.093	-.135	-.221	.045	.073	.230
	対家族自己主張(価値)	-.005	-.003	.023	-.041	.335*	-.176	.037	.049	-.065	-.105	.143	.082
	対家族自己抑制(価値)	.087	.134	-.143	.225	.141	.200	.136	.172	-.079	.082	.044	.121
	対目上自己主張(価値)	-.070	.074	.186	-.021	.279	-.326*	.091	.035	.113	-.046	.230	.093
	対目上自己抑制(価値)	-.099	.042	-.408**	.466**	.026	.410**	.018	.105	-.075	.151	.195	.308

*p <.05, **p<.01, ***p<.001

ため、場面（①②③の3場面）×行動面（主張面・抑制面）の被験者内二要因の分散分析を行った。場面の主効果、行動面の主効果、場面と行動面の交互作用、すべてが有意であった（ $F(2, 38) = 8.33, p < .01$ ； $F(1, 38) = 58.02, p < .001$ ； $F(2, 38) = 47.99, p < .001$ ）。下位検定の結果、以下の5点が明らかになった。(1) ①家族に対する自己制御行動尺度得点の平均値は、その他の場面（①③）と比べて有意に高かった。(2) 抑制面の自己制御行動尺度得点の平均値は主張面の平均値と比較して有意に高かった。(3) ②PTA・町内会③親戚に対する場合には抑制面が主張面より有意に高かった。一方、②家族と一緒にいる場合には主張面と抑制面の平均値に有意差はなかった。すなわち、母親は家族という場合には主張的な自己制御行動・抑制的な制御行動同程度にとっており、家族以外の場面では抑制的な自己制御行動を主張的な自己制御行動より多くとることがわかった。(4) 主張面の自己制御行動の平均値は①が②③より高かった。(5) 抑制面の自己制御行動の平均値は①が②③より低かった。

母親の3場面の主張面・抑制面の価値尺度得点の平均値の比較

相手が誰かによって主張面・抑制面の価値尺度得点の平均値に有意な差があるかを検討するため、場面（①②③の3場面）×行動面（主張面・抑制面）の被験者内二要因の分散分析を行った。場面と行動面の交互作用が有意であった（ $F(2, 38) = 11.06, p < .001$ ）。下位検定の結果、以下の3点が明らかになった。(1) ②PTA・町内会③親戚に対する場合に

は抑制面が主張面より有意に高かった。一方、②家族と一緒にいる場合には主張面と抑制面の平均値に有意差はなかった。すなわち、母親は家族という場合には主張的な自己制御行動・抑制的な制御行動同程度にとるのが望ましいと考えており、家族以外の場面では抑制的な自己制御行動を主張的な自己制御行動より多くとることが望ましいと考えていることがわかった。(2) 主張面の価値尺度得点の平均値は①が②③より有意に高かった。(3) 抑制面の価値尺度得点の平均値には3場面で有意な差はなかった。すなわち、母親は自己抑制的行動をとることの望ましさに3場面で違いがあるとは考えていなかった。

青年の行動・価値観と母親の行動・価値観との関連

子どもは母親の行動や価値観の影響を受けるものだろうか。このことを検討するため、青年と母親の自己制御行動尺度得点・価値尺度得点の相関を求めた（Table 5）。母親の行動と青年の行動や価値観との間には少数ながら幾つかの有意な相関が見られた。母親の対町内および対親戚自己抑制行動と青年の対友達自己抑制行動との間に、.468 ($p < .01$), .471 ($p < .01$) の中程度の有意な相関が見られた。母親の対町内および対親戚自己抑制行動と青年の対目上自己抑制価値観との間に、.408 ($p < .01$), .410 ($p < .01$) の中程度の有意な相関が見られた。母親の対親戚自己主張行動と青年の対友達自己主張行動・対友達自己主張価値観との間に、.386 ($p < .05$), .333 ($p < .05$) の弱い有意な相関が見られた。また、母親の対親戚自己抑制行動は青年の対友達自己主張行動・対友達自己主張価値観と-.529 ($p < .01$),

Table 6 青年期の対友達自己制御行動・価値観と幼児期の対友達自己制御行動・母親満足感・乳幼児期の気質との相関

	青年期		幼児期 II				幼児期 I			乳児期		
	対友達 自己主張 (価値)	対友達 自己抑制 (価値)	対友達 自己主張 (母親満足感)	対友達 自己抑制 (母親満足感)	対友達 自己主張 (行動)	対友達 自己抑制 (行動)	回避傾向 (接近- 回避)	非順応性	気分の質 ネガティブ	回避傾向 (接近- 回避)	非順応性	気分の質 ネガティブ
青年期 対友達自己主張(行動)	.655**	.071	.448**	.172	.478**	-.071	-.165	-.255	-.191	-.303	-.253	-.126
青年期 対友達自己抑制(行動)	-.279	.296	-.187	-.088	-.159	-.015	.174	.310	.313	.138	.099	.186
青年期 対友達自己主張(価値)			.467*	.258	.375*	.087	-.307	-.214	-.251	-.239	-.120	.143
青年期 対友達自己抑制(価値)			-.036	-.151	-.144	-.151	-.215	.046	-.001	-.369*	-.242	.354*
幼児期 II 対友達自己主張(母親満足感)					.703***	-.099	-.565**	-.381**	-.202	-.280	-.171	-.242
幼児期 II 対友達自己抑制(母親満足感)					-.069	.780***	-.192	-.561**	-.381*	-.155	-.041	-.335*
幼児期 II 対友達自己主張(行動)							-.448**	-.307	-.140	-.333*	-.380*	-.176
幼児期 II 対友達自己抑制(行動)							-.042	-.448**	-.377*	.040	.046	-.083

*p <.05, **p<.01, ***p<.001

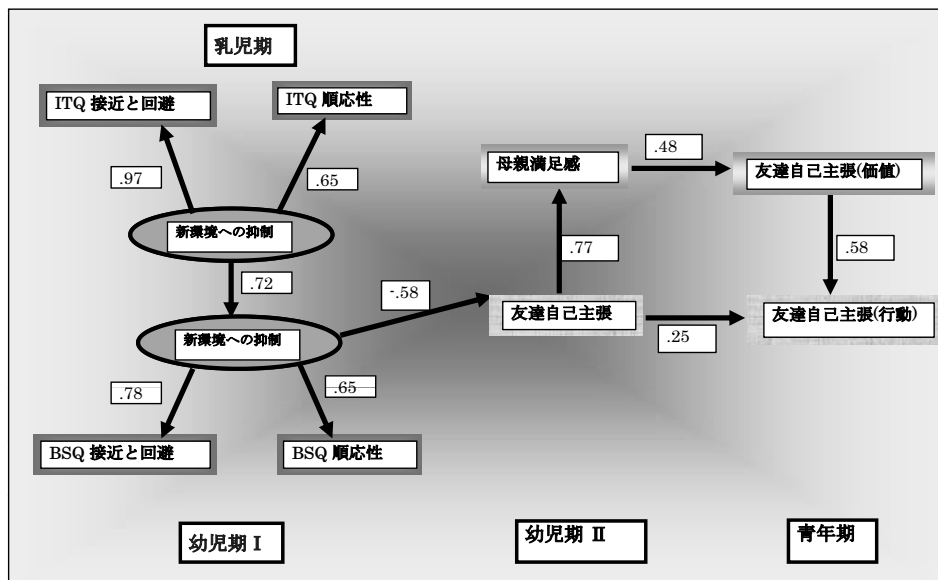


Figure 4 青年の自己主張的自己制御行動の発達過程：乳幼児期～青年期の縦断分析

-.492 (p<.01) の中程度の弱い負の相関を示した。母親の価値観と青年の行動や価値観との間には1つの有意な相関(母親の対親戚自己主張価値観と青年の対友達自己主張行動との相関が.432 (p<.01) 以外は関連が見られなかった。家族に対する自己制御行動と価値観には、青年と母親の間に何ら関連は見出されなかった。

青年の友達と一緒にいる場合の自己制御行動の個人差：その発達過程の検討

では、子どもの自己制御行動の個人差をもたらすものは何だろうか。本研究では、乳幼児期の子ども

の気質が子どもの友達と一緒にいる場合の自己制御行動を説明したとの水野(2002)を発展させる形で、縦断データの検討を行った。青年期の子どもの対友達自己制御行動と乳幼児期の変数との相関をTable 6に示した。これらの変数間に仮定されるモデル図をFigure 4に示した。新奇な場面や事物・人物に対して回避する行動傾向や状況の変化への順応性が低い個人特性として「新環境への抑制」を仮定した。乳幼児期の新環境への抑制の個人差に安定性が見られ、それが幼児期に友達との場面で自己主張的自己制御行動をとりやすくしていると仮定した。母親は、自分の子どもが自己主張的自己制御行動をとること

を評価し満足感を高める。その母親の満足感が青年期の自己主張的自己制御行動の価値観へ影響を与え、実際の行動へとつながると仮定した。共分散構造分析を行った結果、すべてのパスで5%水準で有意な標準化推定値が得られた。適合度指標は、CMIN=18.545 (df=18, p=.420), GFI=.904, AGFI=.808, CFI=.994, RMSEA=.028 であり、モデル全体の当てはまりは良好であった。

考察

自己制御機能尺度の因子分析結果から、幼児期には自己抑制尺度を構成していた項目（「思いどおりにいかないとかんしゃくを起こす（逆転項目）」「一度言い出したら、頼まれたり説得されても耳を貸さない（逆転項目）」）が、青年期になると、自己主張尺度・自己抑制尺度とは異なる「自己中心的尺度」の構成項目となった。この結果は、幼児期の質問紙調査の回答者は子どもの母親であり青年期の質問紙調査の回答者は青年自身であることを考慮すると、青年はこれらの行動と社会的に見て望ましい自己制御行動とを分けて考えるようになってきていることを示唆している。それに対して、幼児の母親には自分の子どものこれらの行動は自己抑制的自己制御機能が未発達であるがゆえの行動と受け取られていたことを示唆している。しかしながら、この認識の違いが、行動の主体である本人（子ども（青年））とその行動を観察する第三者（母親）の認識の違いなのか、幼児期と青年期とでは行動の認識の仕方が異なるのかについては、幼児期には子どもの母親が回答者・青年期には子ども自身が回答者となった今回の調査結果からは推察することができなかった。

さて、その青年は、友達・家族の2場面での自己主張的行動に同程度の高い価値を置いていた。しかし、実際の自己主張行動は、対家族の場合が対友達に対して多くなっていた。このことから、子どもはリーダーシップをとり自分の意思を適切に主張する行動は望ましいと思いつながら、友達に対しては控えてしまう傾向にあると考えられた。青年が主張することが望ましいと考えながらも主張できないのは、適切な方法で主張する術を知らないからかもしれない。もしそうならば、ソーシャル・スキルトレーニングは大いにその価値を発揮するものとして期待できる。ところで、青年は、目上に対する自己主張行動には価値を置かないし実際にそうした行動をとってもいなかった。そして、自己抑制行動を望ましい

と考え、実際にそのように行動していた。長幼の序を重んじなくなったと言われることの多い青年であるが、サークルの先輩・バイト先の上司といった技能や権力において自分よりも優れた地位にあると考えられる「目上」に対しては、それが社会的に見て望ましい行動であっても主張しない実態が調査から伺える。そして、青年が主張しない理由は、適切な方法で主張する術を知らないからというよりは、主張することに価値を置かないからであると考えられた。このことが、日本の青年に特有な実態であるのか、あるいは、どの社会でも見られる実態なのかについては、更なる調査が必要であろう。

では、こうした青年の行動や価値観は養育者たる母親の行動や価値観と関係があるのだろうか。意味のある相関と考えられたのは、母親の対町内・対親戚自己抑制行動と青年の対友達自己抑制行動・対目上自己抑制価値観との間に見られた正の相関であった。このことは、母親が町内の人々や親戚に対して家族に対するのとは異なった抑制的自己制御行動をとると、その子ども（青年）も友達に対して抑制的自己制御行動をとっていること・目上に対して自己抑制的な行動をとるのが望ましいと考える程度が強くなることを示している。また、母親の対親戚自己主張行動は青年の対友達自己主張行動や価値観と有意な相関があったことを合わせて考えると、母親が親戚に対してどのように自己の意思や欲求を制御するかを子どもが観察していて、その行動傾向を自分の友達に対する自己制御行動に取り入れている可能性が考えられる。そして、家族内での自己制御行動（対家族自己主張・自己抑制行動）には母親と青年の間で全く関連が見られず、どういった行動をとるのが望ましいと母親が考えるかといった価値観と青年の行動・価値観とほとんど関連がなかったという2点を考え合わせると、自己制御に関する行動や価値観は家族内で母親から子どもに伝達される（教えられる）ことは少ないと考えられた。

ところで、青年の自己制御行動といくつかの相関を示した母親の自己制御行動であるが、その平均値の比較を行った結果から以下の点に注目しておきたい。家族に対する行動としては自己主張も自己抑制も同程度示しており、家族以外の場面では自己主張が抑えられ自己抑制が多くなっていた。やはり、子どもと同様、「うち」と「そと」の区別をした制御行動を示していると言えよう。ただ、子どもに比べると家族に対しても抑制行動を多く示しており、ど

の程度そうした行動をとることが望ましいと考えるかといった価値観との乖離も少なく、主張面・抑制面のバランスの取れた自己制御行動を行っていると考えられた。

最後に、乳幼児期から青年期の縦断データの分析結果 (Figure 4) から、同胞集団で青年が示す自己制御行動の発達過程について考えたい。子どもが一歳代になると気質的個人差が安定してくるので母親にも自分の子どもの行動特性が目につくようになる。「接近と回避」で測定される気質的個人差は行動的抑制傾向として乳幼児期から顕著になり青年期まで安定している個人差として報告されているものである (Kagan, Snidman, Kahn & Towsley, 2007)。「順応性」については扱いにくい子どもを判定する気質次元である。乳幼児期は、子どもは日々新たな人との出会いや初めて目にするモノに好奇心を示しつつ行動半径を広げていく時期である。ゆえに、初めての人物・事物に対する子どもの行動や普段とは環境が異なった場合の子どもの行動を親が観察する機会が多く、この2つの気質次元における個人差は親に認識されやすい。共分散分析構造を行った結果、「接近と回避」「順応性」を説明する「新環境への抑制」の個人差に乳幼児期～幼児期Ⅰへの連続性が見られたのは、そうした実情を反映していると考えられる。そして、新環境への抑制が低い子どもほど友達に対しては自己主張行動を行うことが示された。ただし、幼児期には自己主張行動は未熟なことが多い。例えば、同胞 (仲間) 関係で起きる架空の葛藤場面 (玩具の取り合い) に対する幼児の回答を調査した山本 (1995) は、身体的な攻撃による自己主張、言語的手段を用いない取り返しによる自己主張、他者依存的自己主張 (先生に言うなど) は年齢の増加とともに減少し、説得による自己主張 (言語的な拒絶・自己の権利の要求など) は年齢とともに増加することを明らかにしている。本研究の結果は、どのような方法であれ、ともかくも自分の子どもが自己の意思を同年齢集団の中で表明したり不当なことをされた時に抗議できると、母親はそうした子どもの行動を評価することを示した。そして、幼児期に子どもの示す自己主張的行動に満足していた母親の子どもほど、青年期に達した時に、友達に対して自己主張的行動をとることに価値を置いていた。そして、そうした価値を重んじる青年ほど、実際に友達に対して自己主張していると考えられた。なお、幼児期の友達に対する自己主張行動から青年期の友達に対す

る自己主張行動への直接効果が見られていることから、幼児期に形成された個人特性としてある程度の連続性を持つものとして自己主張的自己制御行動を考える余地があることに留意しておきたい。

まとめと課題

本研究は、青年期の対人場面での自己制御行動の個人差とその発達について、自己主張的側面に比重を置いて検討してきた。自分の意思を通したり抗議や異議を伝えたりリーダーシップをとるといった日本人が苦手とする行動の必要性が高まっているとの問題意識を持って行った研究であった。その結果、子どももその母親も「うち」と「そと」を使い分けて自己制御行動を行っていること、青年は友達に対しては主張することが望ましいと思っはいるが行動には移していないこと、「目上」の人に対しては自己主張行動を行わないばかりか価値をも置かないことなどが明らかになった。また、自己主張行動の個人差という観点から分析すると、乳幼児期の気質が友達に対する自己主張行動と関連を持っており、乳幼児期～青年期にいたる長いスパンでも影響を及ぼしている可能性が考えられた。

上記のように、本研究は、青年が自己の規範に従い自分の意思表明をどの程度するかについて、「うち」と「そと」という観点を入れる重要性を明らかにし、その個人差の発達については乳幼児期の縦断データから検討する必要性を明らかにした数少ない研究である。しかしながら、自己主張的自己制御行動の発達を考える研究としては以下の限界を持っていた。本研究においては、アサーショントレーニングが扱うような適切な方法での自己主張行動を「自己主張的自己制御行動」とはしなかった。ゆえに、自己主張的行動をしているといってもそれがどのような方法でなされているかについては問題にしていない。だから、「ルール違反されると抗議する」と言った場合には、極端な場合攻撃的に感情をぶつけている事態をも含んでいる可能性がある。すなわち、本研究において、自己主張的自己制御行動得点が高かった者の中に、主張できるがその方法が適切でない者が含まれている可能性がある。本研究の自己制御行動尺度は、そうした者を弁別できる尺度にはなっていない。また、現時点 (2011年9月) では、まだこの点を弁別できる自己主張的自己制御行動尺度は開発されていない (比較的最近開発された自己制

御尺度として、幼児用に大内・長尾・櫻井（2008）、青年用に原田・吉澤・吉田（2008）、児童用は少々古くなるが自己主張性尺度（濱口（1994））があるが、それらもこの点を弁別できる尺度とはなっていない。

上記のような方法上の限界があるゆえに、今回の調査で自己主張的自己制御行動が高いと回答した者であっても、その主張行動が適切でないがために友達つきあいに困難を感じている青年が含まれている可能性がある。この場合、本研究の縦断データからどの程度自己主張するかには気質的個人差が影響することが示唆されているので、主張する態度そのものは個人の特性として評価しつつ、適切な主張スキルを獲得させる必要があるだろう。おそらく、他者に受容される形での自己主張のノウハウを教えるアサーショントレーニングはこうした青年に有効に働くと期待できる。さて、本研究は、実際にどの程度主張行動をとるか（行動尺度で測定）と主張行動をどの程度望ましいと考えるか（価値観尺度で測定）との双方を尋ねており、行動尺度得点が価値観尺度得点から大幅に低くなっている者、すなわち、主張したい（主張することが望ましい）と思っはいるが実際には主張できない者を同定することができる。アサーショントレーニングは、こうした者、すなわち、主張したいのに主張できない青年に対しても有効に働くであろう。

また、本研究はあくまで自己主張行動が望ましいとの観点からその発達過程についての分析を行ったが、メンタルヘルスの観点からは何ら検討していない。よって、「空気を読む」ことを美德とする文化に在る限り、自己主張面の行動尺度得点・価値尺度得点双方が低い青年は人間関係上のストレスを感じることなく生活している可能性がある。この点は、自己の意思を表明する・リーダーシップをとるといった行動を青年が獲得すべきと考えた本研究の守備範囲外にあった。

文献

- 東洋. (1994). 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて. 東京：東京大学出版会.
- 濱口佳和. (1994). “児童用主張性尺度の構成.” 教育心理学研究 42 (4) : 463-470
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和. (2008). 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成：妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連. パーソナリティ研究 17 (1) : 82-94
- 平木典子. (1993). アサーション・トレーナーさ

- わやかなく自己表現) のために一. 日本・精神技術研究所 (発行) 東京：金子書房.
- 伊藤篤. (2002). 幼稚園児の自己主張・自己抑制の発達的变化 (2) : 横断データと縦断データの比較. 人間科学研究 10 (1) : 37-48.
- Kagan, J., Snidman, N., Kahn, V., & Towsley, S. (2007). The preservation of two infant temperaments into adolescence. Monographs of the society for research in child development, 72 (2), 1-75.
- 柏木恵子. (1988). 幼児期における「自己」の発達一行動の自己制御機能を中心に. 東京：東京大学出版会.
- 松永あけみ. (2008). 幼児期における自己制御機能 (自己主張・自己抑制) の発達一親および教師による評定の縦断データの分析を通して一. 群馬大学教育学部紀要. 人文・社会科学編 57 : 169-181.
- 水野里恵. (2002). 母子相互作用・子どもの社会化過程における乳幼児の気質. 東京：風間書房.
- 森下正康. (2003). 幼児の自己制御機能の発達研究. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 13 : 47-56.
- 大内晶子・長尾仁美・櫻井茂男. (2008). 幼児の自己制御機能尺度の検討：社会的スキル・問題行動との関係を中心に. 教育心理学研究 56 (3) : 414-425.
- 佐藤淑子・目良秋子・柏木恵子. (1999). 就学前児の社会的認知認知的発達に関する縦断的研究 (1) —社会場面における自己制御機能の発達一. 発達研究, 13, 52-62.
- 鈴木亜由美. (2005). 幼児の対人場面における自己調整機能の発達：実験課題と仮想課題を用いた自己抑制行動と自己主張行動の検討. 発達心理学研究, 16, 193-202.
- 戸田まり・高野創子. (2004). 幼児の自己制御とその発達に対する保育者の評価. 北海道教育大学紀要 (教育科学編) 第55巻, 第1号, 195-204.
- 山本愛子. (1995). 幼児の自己調整能力に関する発達の研究：幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について. 教育心理学研究 43 (1) : 42-51.

(受理年月日 2011年9月30日)